

## When We Are the Government

HS 2<sup>nd</sup> Year Nanako Kurioka

“It follows, plainly, from the explanation given above, of the foundation of state, that the ultimate aim of government is not to rule or restrain by fear, nor to exact obedience, but contrariwise, to free every man from fear, that he may live in all possible security; in other words, to strengthen his natural right to exist and work, without injury to himself and others” – *Spinoza*

In this quote, Spinoza is arguing that the function of the government is not to oppress its people into submission, but to free them from such loads and allow them to live as a human being with his legitimate right to fulfil his life. And upon this, I think a “right” turns a human being from an animal to a social being, and allows him to think ? a process that forms the very base of life.

Spinoza argues that the government should free people from fear, but I think a complete freedom is impossible. For example, the reason why you do not commit a crime is not just because it goes against your morality, but you fear to violate the law. The fear of being punished stops would-be offenders from doing what they are attempting to do. Nonetheless, the government could free people from fear, by making them act accordingly to their responsibilities. Sartre says that “Man is alone, abandoned on earth in his infinite responsibilities”. We are never free; there are various duties that we forge for ourselves and chain ourselves to responsibilities that we know not of. However, even though we may not be a hundred-percent free, if we take our responsibilities seriously, we will be able to live as citizens.

In many countries, the government is formed in hope of a better nation, with a specific aim; for example, ending the war, or industrializing the country. Yet when that goal is achieved, the same government policies can no longer be applied for the good of the people. We need a government that will not be blinded by power, a Party that is formed by good thinkers. To have the leaders to become philosophers and philosophers as leaders, as Plato argues, is a very effective way to achieve a just state.

All in all, I agree with Spinoza that the government should always aim to strengthen people's right to think for ourselves and do accordingly. The task of the government is to free the people from fear as much as possible, although a complete freedom is not realistic. Ideally, the government should not be an oppressor at all; it should always be open and easily affected by its people, and not overpowered by a specific thought. The power of the government must be purely provided by the people each moment, so that the relationship of the ruled and the rulers are flexible. To this end, we must realize what it means to have a right to think, and the duty that comes from it. Therefore, the ideal state would be the situation in which we are the government, and the government is us; and that is what we must aim at.

## DOSHISHA CLOSE UP

### 国際哲学オリンピック 国際高校 栗岡奈子さんが入賞

国際中学校・高等学校  
国際教育センター副主任  
塩見賢司

トルコで今年5月に開催された高校生哲学小論文コンテスト「第15回国際哲学オリンピック」に、同志社国際高校2年の栗岡奈子さんが出場し、日本人初の入選となる佳作に選ばれました。

このコンテストは1993年にブルガリアで始まり、国際哲学協会連盟などが毎年開催しているものです。参加者は提示された哲学者の論文に対する自分の考えを、母国語以外の言語で4時間以内にまとめるものです。今年は22カ国より49人が参加して行われました。

栗岡さんは哲学者スピノザが「国家の究極的目的」について記した文章に対して、「国家が存在する目的は人々が自分で考え行動する権利を保障すること」と定義し、英語でA4判1枚にまとめました。以下は、その要約・回想です。

同志社国際中高国際教育センターでは、国内外で行われる国際会議や研修プログラムへの参加啓発をしています。これまで国際哲学オリンピックの他に、国際科学技術キャンプ、グローバル・エンタープライズ・チャレンジ等への参加を奨励し、生徒たちは輝かしい成果をあげています。



栗岡さん

# 学習を主体者である 子どもに返す道草教育

（子どもから発信される道草の芽を大切に）

小学校主事教諭

太田 誠

## 子どもの声をきく「道草」

本校で設定されている「道草」の時間は、「総合的な学習の時間」や「児童会活動」、「縦割り活動」「学級会」、「学年の時間」などを総称しています。その中で、鍵になるのは「総合的な学習の時間」の扱いだと考えています。

例えば、3年生になったら「地域交流」、4年生になったら「福祉」、5年生になったら「情報」、6年生になったら「国際交流」という具合に、子どもの声や実態を掴む前から取り組むことが決まっていたとしたら、「総合的な学習の時間」という教科が、一つ増えただけのことになります。「そこから、子ども自身が考えることもある」と聞かされることもあります。常に学習課題を与えられ続ける子どもたちに、学びの主体性は本当に育つのでしょうか。

教師側は良かれと思っていても、学ぶ必要感のない子どもたちにとっては、負担が加算されていくばかりです。同じように労がかかることであったとしても、子どもたち自身が求めていることであれば、当たり前のことですが、苦になりません。と

ずともしつかり聞き取ってまとめようとする、その子なりの味わいがみえるようになってきました。また、発表者の方にも、大切にしている実物を持ち込んだり、画用紙に見やすくまとめたりと、創意工夫が出てきました。

## ●A子の日記より

きょう、はじめて みちくさの けんきゅうはつびょうをしました。きのうから、どきどき していたけど、まえに たつと、すつと いえました。みんなが、たくさんのおたずねをしてくれたので、むちゅうで こたえました。うれしかったです。こんどは、もっと もっと いいはつびょうを しようとおもいます。

子どもたちの様子を見ると、道草の時間をとても楽しみにしているようです。発表の予約は、後を絶えません。それは、自分が関心のあることを図書室で調べたり、そのことを友達に紹介し、知ってもらったことが、大きな喜びになっているからです。また、最近の日記からは、友達の発表から学ぶことを、心から楽しんでいる様子も多々伺えます。

一人の子どもから発信されたテーマ（課題）が、お互いにおたずねをし合うことで、どんどんと深まっていくことを、一年生でありながら、感じ取っているのです。実物の石や自作の白爪草の冠、実物大のティラノザウルスの顔など、実感を重視しようとしているのも、子どもたちの特徴です。教師が綿密なお膳立てをしなくても、子どもたちは育っていきます。その育っていく子どもたちの姿に寄り添いながら、一緒に道草教育を模索し、楽しんでいきたいと思っています。

Hardy 1年 で発表された道草研究のタイトル（5/11～7/10） \*グループ発表は、2名以上

5/11	1	のうの しぐみ	6/7	2	ござんの おくりび	6/21	1	うちゅう (グループ発表)
	2	わずれなぐさの おしぼな		3	アザラシ		2	バス
	3	いえの まえの たんぼ		4	チーター		3	くわかた
	4	あおさぎ		1	カブトムシ		4	だんごむし
5/15	5	おはな	6/11	2	アサガオ	6/26	5	びわこの さかな
	1	ミニマト		3	じてんしゃの マナー		1	にがうり
	2	たからがけいのはなととり		4	ひらかな		2	くだものと やさい (グループ発表)
	3	ハルジオン		1	モルモット		3	ぎんかくじ
5/17	4	のうの しぐみ2	6/12	2	ミニマト	6/28	4	ひこうきくも
	1	あまみおおしまのカヌー		3	たいようけいの ほしたち		5	モンシロチョウ
	2	たからがけい2		4	おたまじゃくし	6/29	1	カブトムシ
	3	たからがけいの ちず		1	ハムスター		2	いろいろないしパート2
5/22	1	まつおまつり	6/14	2	すからべ ふんころかし		3	カーベラ (グループ発表)
	2	トミカはく		3	しろつめぐさ		4	きょうりゅう (グループ発表)
	3	かえる		1	ひるがお		1	きょうりゅう
	4	ヒル	6/16	2	りんどう	7/3	2	しまりす (グループ発表)
5/24	1	どうぶつの え		3	みやざきけん		3	ブラックホール (グループ発表)
	2	アンモナイト		1	にじ		4	ひらかなパート3
	3	きょうと しょうぶつえん		2	100えんショップ	7/5	1	いしパート3
5/28	4	ののくき ノート	6/18	3	ひまわり		2	ひまわり (グループ発表)
	1	ドライアイス		4	いし		3	ハングルもじ (グループ発表)
	2	ペットボトル		5	ジャチ		4	とんぼ ずかん
	3	あさがおの はの はえかえ		6	コロッケの つくりかた		5	さんこしよう
5/29	1	ハイビスカス	6/19	1	きょうりゅう	7/10	1	めだか
	2	ヘビと カエルは どっちがつよい		2	ひらかなパート2		2	せんち こがねむし
	3	へんかアサガオ		3	いきもの		3	ぼうえんきょう
	4	ねぎぼうず		4	ロボット		4	カエルの からだ
5/31	1	きれいな いし	6/19	1	カニの たつび	7/10	1	しんかんせん
	2	アメリカザリガニ		2	うどんの つくりかた		2	くるま (グループ発表)
	3	サツキ		3	かめ		3	いしパート4
6/5	1	うずしお		4	ふくろう			

## ぐんぐん伸びる子どもたち

本学級の子どもたちは、4月から、黒板の前の舞台に立って、順番に自己紹介をしていきました。初めは自己紹介を一方的にするだけでしたが、2回目からはおたずねが加わるようになりました。その後、単なる自己紹介から進歩して、自分が関心のあることを紹介するようになっていきました。個々には、まだまだ声が小さくて聞き取りにくかったり、なかなかおたずねが言えずに聞いているだけの子どももいます。しかし、回を重ねるうちに、一生懸命大きい声を出そうと努力したり、手は挙げ

ころが、教師が張り切って、壮大なプランを立てて、子どもたちに押し付けていけばいくほど、学習そのものが子どもたちから遠くなっていく傾向があるのです。

そうならないようにするために、喻えたのだとしく、いらいらするようないくことがあっても、年間を通して、子どもたち一人一人の声を聞く機会を設けていくことにしました。簡単なものから念入りなものまで、子どものありのままの発表スタイルを受け入れ、おたずねを通して掘り下げていきました。